

香取市におけるさつまいも振興

香取市生活経済部農政課 課長

かく た としのぶ
角田 利信

～はじめに～

まちづくりの「羅針盤」となる「第2次香取市総合計画後期基本計画」の策定にあたり、香取市長伊藤友則からの挨拶文で、香取市の偉人である伊能忠敬翁の「歩け、歩け。続ける事の大切さ。」という言葉を紹介している。困難な状況の中、危険を顧みず当時の最新技術であった天体観測や杖先羅針盤を用いて広大な実測地図を作った伊能忠敬翁の信念ともいえる、並外れた努力と継続することの重要性が詰まった言葉だ。

現在、全国的に人口減少・少子高齢化が進行しており、本市においても2022（令和4）年4月に一部地域が過疎地域に指定されるなど、深刻な状況に陥っている。人口減少による様々な変化やリスクは想定されるものの、この先の社会を見通すビジョンを描き、方向を見定め、将来への一步を踏み出さなければならない。

農業は香取市の基幹産業であり、その中でも「さつまいも」は産出額が伸びている。将来都市像「豊かな暮らしを育む 歴史文化・自然の郷 香取 ～人が輝き 人が集うまち～」の実現に向けて、さつまいもの生産拡大に取り組む若い担い手に希望を導き出して農業後継者を育成し、持続する農業の発展に向けて踏み出す必要がある。



伊能忠敬翁絵

1 香取市の農業

（1）耕地面積

香取市は、千葉県で一番多く耕地を有しており、令和3年の耕地面積は11,110ha、水田面積は7,720ha、畑面積は3,390haで、平坦な北総台地を中心に「北総東部用水」による畑地かんがい用水が整備され、用水を活用した多様な園芸が盛んに行われている。

利根川、常陸利根川の流域には県内を代表する肥沃な水田穀倉地帯が広がり水郷早場米の生産地となっている。一方、南部地域は、関東ローム層の赤土に覆われた北総台地の一角を形成して、山林や畑などの平坦地が広がっており、露地野菜等を中心とした畑作地帯で、さつまいもなどの生産や

畜産も盛んな地域である。



香取市位置図

(2) 農業産出額

令和3年市町村別農業産出額（推計）における産出額は277.8億円で県内2位（全国35位）を占めている。主な作目としては、米が51.5億円（18.5%）県内1位（全国33位）、地域特産のいも類は76.3億円（27.5%）県内2位（全国4位）、畜産が95.0億円（34.2%）県内2位（全国81位）となっている。

令和3年 全国産出額上位5市町村（いも類）
（億円）

順位	市町村名	産出額
1	鉾田市（茨城県）	152.7
2	成田市（千葉県）	89.7
3	行方市（茨城県）	85.8
4	香取市（千葉県）	76.3
5	雲仙市（長崎県）	65.1

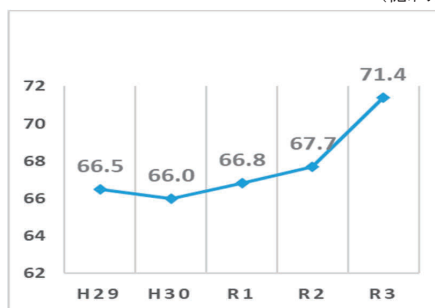
(3) さつまいも生産状況

さつまいもの産出額は、需要が増えていることや、単価の上昇により年々増加している。香取市の特産であるいも類は全国的に見ても高い水準であり、香取市として誇れる品目となっている。



香取市のサツマイモ畑

香取市における「かんしょ」産出額の推移
（億円）

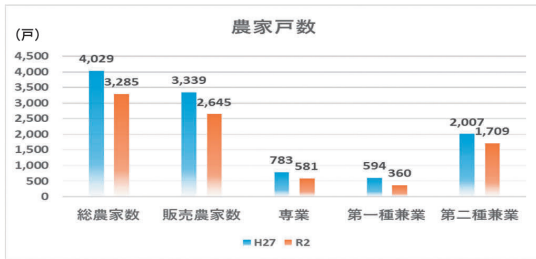


2 さつまいも生産強化への課題

(1) 高齢化や労働力不足による生産規模の減少

本市においても農家数の減少が続いており、今後さらに高齢化が進んで、作付け面積や出荷量の減少につながることが想定される。

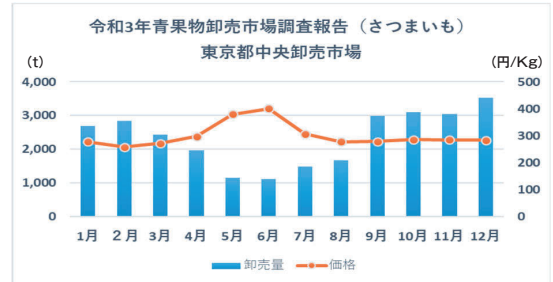
農家戸数（農林業センサス）



（２）簡易貯蔵による品質低下及び年内出荷への集中

現在、さつまいもは厳寒期での簡易貯蔵により品質が低下するため、出荷は年内に集中している。過去をみれば将軍家へ野菜を納める「青物役所」から1832年（天保3年）に下総国千葉郡6ヵ村と武蔵野国入間郡24ヵ村のサツマイモが納入の指定産地として直納が認可され、夏の土用を過ぎてから12月の暮れまでは千葉郡の早出しサツマイモを納め、正月から夏の土用までは入間郡の囲いサツマイモ（貯蔵いも）を納めていた。このことから、既に入間郡には貯蔵技術があり、現在の貯蔵による付加価値をつける出荷時期の調整技術があったと思われる。

東京都中央卸売市場の令和3年青果物卸売市場調査報告（さつまいも）からも、9月から12月の集荷量が最盛期であり、4月から8月は出荷量が低下していることがわかる。出荷時期が集中する要因の一つに貯蔵庫が不足していることが挙げられる。簡易貯蔵では、長期間の貯蔵が難しく、品質の低下につながることから、止むを得ず出荷を早めているものと思われる。



３ 香取市さつまいも産地強化推進協議会の設立

このような状況の中で、高齢化や労働力不足に対応するため大規模農家を育成して国内外の需要に対応できる供給体制の構築を図り、産地を強化するため、令和5年5月に千葉県香取農業事務所、ＪＡかとり及び商系業者を含めた「香取市さつまいも産地強化推進協議会」を設立した。

（１）推進内容

- ・規模拡大農家を育成するため、高単価時期の出荷に必要な貯蔵庫の整備及び貯蔵に必要なコンテナの導入を推進する。
- ・健全で高品質な苗を安定的に生産・供給するために必要な育苗用パイプハウスの整備や育苗に必要な保温資材の導入を推進する。
- ・貯蔵、洗浄、選果能力を向上するため大型施設の導入を推進する。
- ・さつまいもの付加価値を高めるため、加工施設及び冷凍施設の整備を推進するとともに加工品の販路拡大を推進する。

（２）連携強化の必要性

さつまいも生産・加工・流通業者間で、事業の余剰分野と不足分野を補い合うことができるよう協議を進めることにより、市

内に現有する施設の規模と機能でも、お互いが結びつくことで更に成長できる部分があることがわかった。

今後、地域内での分業・委託・協業等による連携を図り、生産・原材料の供給・加工の分業・出荷などの連携を調整し合えば、結果として本市における生産体制の強化につながる。

(3) 農地集積

地域計画の策定においては、「大規模拡大農家の育成及び連携による生産体制の強化」を図り、農地の集約化を進めることとしている。また、「北総東部用水」による畑地かんがい用水が整備されている農地への集約を進める。

(4) 販売促進・教育活動

千葉県とも連携を図り、さつまいもプロモーション事業の展開や海外を視野にいったインバウンド需要等に対応した販売促進活動を展開していく。

消費者へのPR活動として、秋の収穫祭「栗源のふるさといも祭」の開催や全国規模のさつまいもイベントへの参加を促進する。

また、将来の担い手になる小中学生を対象とした芋けんぴ及びさつまいもリーフレットの配布による地元特産品の教育活動に取り組む。



いも富士ステージ



焼いも無料配付

4 千葉県の産地強化の取り組みとの連携

(1) 強化品目の産地戦略

千葉県では「千葉県農林水産業振興計画」(令和4年度～令和7年度)を策定し、強化品目の産地戦略として野菜の産出額上位品目の「ねぎ」、「さつまいも」、「にんじん」、「トマト」が定められている。なかでも「さつまいも」と「にんじん」については、主な地域として香取地域が位置づけられており、香取市においても本計画期間中に産地を強化する必要がある。

(2) さつまいも生産拡大緊急プロジェクト事業の活用

特に、千葉県では国内外ともに需要が急拡大する一方で、全国的に供給が不足している「さつまいも」について、生産・流通

体制の強化に必要となる施設整備を支援するため、今年度から「さつまいも生産拡大緊急プロジェクト事業」を新規に立ち上げた。同事業を香取市のさつまいも生産者が活用できるよう、市でも単独で上乗せ補助を追加し、生産・流通体制の強化を加速することとしている。

既に生産者への活動として、事業説明会の開催や千葉県が実施する機械・資材実演会への参加を呼びかけ、今後の補助事業の活用や機械導入のアンケートを実施し、今後の導入計画を策定しているところである。

5 さつまいもの生産を伸ばす次世代の担い手

(1) 農地所有適格法人株式会社カワコファーム

さつまいもの産地強化を推進する中で、いわゆる I ターンで参入してサツマイモの生産を伸ばしている次世代の担い手がいる。浅草から香取市に就農した「農地所有適格法人株式会社カワコファーム」である。

2010年（平成22年）9月、浅草にある創業明治9年の甘藷問屋株式会社川小商店が



昭和15年川小商店齊藤家の節句（浅草駒形本店前）
（提供：株式会社川小商店）

千葉県香取市の北総台地を自社の原料生産拠点に選んでサツマイモ加工工場を新設。その後、2018年（H30年）9月に株式会社カワコファームを設立し、自社農場でサツマイモを生産している。

就農当初の農業経営計画は、耕作面積50aで、5年後に300aまで拡大する計画であったが、約2400aにまで拡大し、農場と加工工場を合わせると、32人もの従業員を地域から雇用している。

この間、新型コロナウイルス感染症感染拡大による行動制限など世界中が閉塞感に包まれ、農業をはじめ飲食業から加工品生産業まで、ほぼすべての業種が苦しんだ期間があったが、これを乗り越えて当初計画より約8倍に耕作面積を拡大している。

(2) 長寿企業の経営理念

「自分たちで作ったサツマイモは、農民に正当な代金がわたるようにしなければならない。そのため自ら販売しよう。」

1876年（明治9年）、川小商店の創業者である齊藤小平次は、隅田川の大川端（現在の浅草駒形河岸）に小売りの焼きいも屋と卸業を兼ねて創業した。屋号の「川小商



昭和10年頃の川小商店三河島売り捌き所（支店）
（提供：株式会社川小商店）

店」は出身地の川越の「川」と名前の小平次の「小」の頭文字を取り入れて命名したもので、当時、浅草は川越と東京を結ぶ物流の大動脈である川越舟運を通じてサツマイモなどの物資の大集積地として賑わっていた。サツマイモ農家と強い信頼関係を結び、農家からは経営維持可能な価格で買い取り、共に栄えるようにしようというのが川小商店の共生の経営理念であり、二代目直衛の時代にサツマイモ農家の「再生産価格の維持」という社是となり、その後も、株式会社川小商店代表取締役社長齊藤浩一から株式会社カワコファーム代表取締役社長齊藤浩史に受け継がれている。

【香取市への生産拠点の設置の経緯】

1981年（S56年）「株式会社川小商店」を分離・独立。

1984年（S59年）「さつまいも菓子専門店興伸」を設立し、大学いも、芋ようかん、スイートポテトの販売へ参入。

1986年（S61年）「おいも専門店興伸」を巢鴨地藏通りへ出店。板橋区大谷口に「興伸・板橋工場」を新設。

1988年（S63年）屋号を「おいもやさん」に改め、「有限会社興伸」を設立してサツマイモ加工・小売り部門へ進出。

2010年（H22年）千葉県香取市のサツマイモ産地に加工工場、冷凍・冷蔵貯蔵庫（敷地面積約3000m²、建物面積800m²）を竣工。

大学いも、スイートポテト等を加工。

2018年（H30年）株式会社カワコファームを設立し、自社農場でサツマイモを生産。品種は「アイコマチ」など。

株式会社川小商店は2012年（平成24年）に五代目齊藤浩一が代表取締役に就任し、事業運営にあたっては代々、引き継いできたサツマイモ生産者への「再生産価格の維持」に加えて、「川上（サツマイモの生産）から川下（消費）へ」と繋がる強固な組織づくり、消費者への「おもてなし」と「おもいやり」の心を大切にして、地域の農家や関係機関・団体との共生を重視し、現在の盛興に結びつけている。

（3）次世代の担い手への期待

「川小商店」そしてカワコファームは、創業明治9年の創業から、関東大震災による壊滅的被害や戦時下の甘藷配給統制、東京大空襲による被災などの試練を乗り越え再復活してサツマイモ加工・小売り部門へ進出、さらに産地である香取市に加工工場を設置、そこを拠点に地域の農家との共生によりサツマイモ栽培に取り組み、コロナ禍を乗り越え繁栄している。

大切なことは先の社会を見通してビジョンを描き、将来への一步を踏み出すことであり、香取市としてもさつまいも振興において、生産から加工、流通、販売までを手掛ける経営ノウハウを共有して次世代の担い手達に伝え、農業発展に繋げていきたい。



株式会社カワコファーム社員
（代表取締役社長齊藤浩史：2列右から1人目）